



小田実全集（小説 第30巻）

玄



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

一章	異装異者	7
二章	幻実現夢	41
三章	愛のかたち	75
四章	アメリカ	111
五章	おいと自由	135
六章	「ニューヨーク」の記憶	163
終章	玄	189



玄

画

玄^{ヒヨン}

順^{スン}
恵^{ヒエ}

一章
異装異者



私が彼らに惹かれたのは、彼らが美しかったからだ。異様に美しかった。

「白昼堂々」ということばがある。そのことばほど、そのときの彼らの美しさにふさわしいことばはなかった。コレット、キャシー、グリア、アン、ミレット。みんながそれぞれの美しさを思い思いにひけらかして歩いていた。夕刻とはいえ、夏時刻の午後六時はまだまだ明るい。少し傾き始めた白い陽光のなか、踵の思い切り高い真紅のパンプスやら大きな花飾りの目立つローヒールの白靴やらを蹴立てるようにして大腿に歩いていた。コレットが派手な花模様のワンピースなら、キャシーはそのころはやりの白いベビー・ドール・ドレスだ。靴下も白。黒い下着がレースの白の下から透けて見えていた。グリアは女教師か女判事然とした（「女判事」は「女教師」のありふれた連想のあと、突然頭に浮かんだ連想だった。そっちのほうが今思い出しても彼女にピッタリする）麻のブルーのスーツ。上衣の襟元に金色のペンダントが燦然と輝く。金持の奥様のお招ばれ姿が好きなアンは、そのときもそのいでたちをしていた。ベージュのアフタヌーン・ドレスに同じ色の長い手袋。しかし、ストッキングは挑発的に黒。踵のひとときわ高いパンプスはさらに挑発的に真紅。ミレットは何んだつたのか。何を着ていたのか。これは、今、どうしても思い出せない。

みんなは大声でしゃべりながら歩いていた。しゃべり散らしながらだ。ときどき大声で笑った。すべて男の声だ。なかにはキャシーのように、天性、女のようにかん高い声の持ち主もいたし、コレットのようにカサブランカかどこかですでに手術をすませて来ていたのもいたが、全体としてみんなは男の地声で大声でしゃべり、笑い合った。まさに傍若無人、白昼堂々だ。街路いっぱいに照り映える初夏の陽ざしにふさわしく、彼らは陽気で明るかった。彼らの美しさはまちがいなく異様だったが、

隠微な翳はなかった。白昼堂々、異様な美しさが翳を引きずらないで歩いていた。

舞台化粧のように彼らの化粧は目立った。一団のなかには、肌がことのほか白くて、生きのままで十分に女に見えるキャシーのように口紅しかつけていないのもいた。女判事のグリアはグリアでまるでほんものの女判事のようにうつすらとしか化粧しなかった。しかし、一団全体の印象は派手な舞台化粧だった。街路の白い陽ざしのなかで舞台化粧は輝いた。輝きのなかで、白、黄、紫、金色、ピンク、赤、真紅。色彩が散乱し、競い合った。黒までがそこにあつた。ミレットは黒人だった。彼女の黒はいちめんに濡れて光つて、どの色彩よりもかえって明るかった。

彼らがほんものの女でないことはすぐに判った。ひとりひとりでいるなら、彼らはもつと女に見えた。肌がもともと白い上に、彼女の当時の口癖を借りて言えば「日本の女」のようにモチ肌でやわらかくすべすべしていた、そして、全体の骨格がほっそりと華奢にでき上っていて（それでも彼女は「日本の女」ではなく、根が男のように頑丈な「西洋の女」だった。「西洋の女」はほっそりと華奢に見えても「日本の女」の私には重くてとうてい持ち上げることのできない物までらくらく持ち上げる）、キャシーはひとりで歩いているなら、まさに女だった。女以外の何ものでもなかった。彼女はコレットのように手術をしたがっていたが、私に言わせれば、その必要はなかった。「どうして」と彼女は不服げだったが、「あなたはもうそれで十分に女なのだから」と私は言った。しかし、そのキャシーも、この「白昼堂々」の一団のなかにとると、女ではなかった。と言つて、男でもない。そのどちらからかはみ出でしまっている。

「第三の性」？ —— そうした気のきいた言い方が当時にもあつたし、今もある。手術をすませたコ

レットや、手術はしていないが（胸の手術は多くがしていた。多くが私よりみごとな乳房の持ち主になっていた。ここで言う手術はもつとかんじんなことにかかわつての手術だ）いつも女装してまるつきり女としてくらしているキャシー、グリアとちがつて（女判事はいつ見ても、何を着ても、女と言うより女判事だった）、金持の奥様のお招かれ姿を実践するアンは、女装したときには近郊の裕福な住宅地の家庭の女主人に見えたが、彼女はべつに女になりたくてその姿をしているのではなかった。ただ、美しくなりたい。そして、その美しさは豪華なお招かれ姿の衣裳に包まれてある美しさだった。そうよく彼女は言つたが、男の服装にかえると、彼は一団の指導者格のジョンで、アンでは決してなかった。その変化は急峻で、私はときどき啞然とした。あなた、そこのお茶碗、とつて下さらない。そう女主人の貫禄を見せてアンが言つたあと、半時間後に、同じ紅茶茶碗を指して、おまえ、この茶碗、とつてくれないか、とジョンが指導者の重みを有無を言わせぬ口調に込めて言つた。女ことばと男ことばにほとんどちがいのない英語のことだから、アン、ジョン、どちらのことばも変らなかつたが、そして声も変らなかつたが、私の耳はいつも敏感に変化を感じとつた。そんなふうに分けて日本語に訳しなおして聞いた。

金持の奥様のお招かれ姿になつていても、アンは女ではなかつた。そう彼女は言つた。そこにあるのは「第三の性」だった。「第三の性」こそ、自分が求め、実現を実践していることだと、いつも彼女はあとをつづけた。わたしは境界線バウンダリーを突破している、と言うときもあつた。女と男のあいだの境界線を突破しているだけではない、女と男がともにかたちづくる人間の土俵を割つて出てしまつてゐる。いや、おれは土俵を叩きこわしているのだ——そうジョンは言つた。おれは自由だ。彼のことば

はそうつづくのだが、アンは、わたしは自由よ、などと余計なことは何ひとつ言わなかった。金持の奥様はただ黙って婉然と微笑した。言う必要はなかった。彼女自身が自由そのものだったのだから。そして、突然、女主人の貫禄を見せて横柄に言った、あなた、そこのお茶碗とって下さらない。

しかし、私には、「第三の性」という言い方は気に入らなかった。あまりにまともすぎて、陳腐な気がしたのだ。土俵を割って出てしまっている、土俵を叩きこわしている——というのも、あたっているようであたっていない。彼らにはべつに土俵を出てしまおうとか、土俵を叩きこわすとか、そうした気持はないように私には見えた。それよりは、当時はまだ「UFO」などというしろものは話題にもなっていない時代だが、今流に言えば、突然地球にやって来て「UFO」から降り立った宇宙人だった。宇宙人は地球の人間にとって、それが女であろうと男であろうと、徹底して異者だ。

地球人の土俵の上では、女と男が組んずほぐれつ、抱き合い、愛し合い、憎み合い、争い合い、殺し合いしている。そのさなかに異者は出現する。こういうとき、観客のなかで異者に気がつくのは、きまつて小さな子供だ。ママ、あれは何、と子供があちこちでおびえた声で叫び出したところで、ようやく鈍感な大人たちも気がついて、満場総立ちになる。もはや、土俵の上の組んずほぐれつなどどうでもいいことになる。そして、そのときには、観客席が異様に静まり返ったのに気がついて女も男も組んずほぐれつをやめてまわりを見る。そこにやって来るのが異者の一団だ。彼らは大声でしゃべり散らし、笑い合いながら、踵の思い切り高い、真紅のパンプスやら大きな花飾りのローヒールの白靴やらを蹴立ててやって来て土俵の上にのぼる。

今でも日本の相撲の土俵は女人禁制だそうだが、それほど神聖な場所だそうだが、彼らはかまいは

しない。何、女は月経の血で汚れている？　だけど、わたしたちには月経はもとからないのよ。月経が欲しくて、月に一度、その手当ての真似をする馬鹿もいるぐらい、ないのよ。ないものはないのよ。大声で笑い合いながら言つて、彼らは舞台の上でよくそうやっていたようにスカートの裾をたくし上げて、その下の純白やら黒やらピンクやら真紅やら黄色やらをいつせいに見せる。とたんに、あ、とひとりがかん高い声で叫ぶ。これ、何、わたいのパンティに血がついている。わたいに月経が来た。うれしい。こんなうれしいことはない、と彼女の叫びは歓喜の叫びに変つてゐる。わたいの月経の血よ、この土俵の上に流れよ、いくらでも流れて、土俵を汚せ。いや、浄めよ。――

冒瀆だつた。その「プラスヘミイ」――「冒瀆」ということばほど、この場合、適切なことばはなかつた。彼らのたちむかう対象が何んであれ、彼らは彼らの存在自体で対象を完全に冒瀆してゐた。彼らにはもちろん対象を破壊する力はなかつた。しかし、つくられた權威、価値、秩序を一瞬のうちにひっくり返してそのおろかさかげんを見せて、冒瀆する。その力を彼らはもつてゐた。

彼らは女の服裝を身に着けていたが、たぶん、彼らは女装してゐたのではなかつた。花模様のワンピースのかたちを借りて、ベビー・ドール・ドレス、女判事のスーツ、あるいは、金持の奥様のお招きばれ着の姿を借りて、彼らは異装してゐた、異装することにおいて、彼らは徹底して異者になつてゐた。そして、異者として、彼らは何より美しかった、その美はすべてを圧倒し、何より冒瀆した。私はその美に惹かれた、彼らの美しさは徹底してゐた。私も徹底して惹かれた、あるいは、いかれた。

徹底していかれなかつたら、私には彼らのあとをつけて、白昼堂々、異装の異者の美をひけらかして街なかを歩く彼らといつしよに彼らが舞台の上でいつそう異装の異者の美を輝かせるナイト・クラ

ブ「ファンタジア」に入って行く勇氣はどうていなかったにちがいない。

憶えているよ、とアンは——いや、よれよれのワイシャツにジーンズのズボンというありふれた男の姿をしたジョンは私の顔を眺めまわすようにして見ながら言った。いつたい、あれから何年、いや、何十年経ったか、という彼の眼だ。いや、それよりは、今私がいつたい何歳になっているかを彼は考えている。そう私が思ったのは、同じことを彼について私が考えていたからだ。あのころで彼は三十歳をたしかに越えていた。すると、今は七十何歳か。いや、八十歳間近か。年をとって元気な老人がこのごろ多いが、ジョンの姿態はまさにそうだった。べつに決して若くは見えないが、ジョギングやら何やらで日ごと鍛えて、精悍な顔とからだつきをしている。そして、何より元気だ。ジョン、あなたはまったく健康に見える——彼のアパートを知人、友人を通じて探しあてて訪れたとき、私はまず彼にそう言った。

かわいい女の子がついて来ると思ったら、それがあんただった。ジョンは回想をつづけた。お茶もいれてくれた。すまんが、その茶碗をとってくれないかね。そのことばを私はアンのことばに重ねあわせて聞いていた。すまないけど、そのお茶碗とつて下さらない。アンはことばつきは丁重だったが、横柄に言った。私はもう何日も洗っていないにちがいない、しみが縁についた大きなモーニング・カップを彼の手に渡した。口紅のしみではない。ただのしみだ。彼の手の甲にしわとしみがいちめんに浮き出ている。しかし、翡翠の指環を彼ははめていた。大きな翡翠だ。それは目立った。

小学生がなぜついて来るんだと、わたしらは思ったね。それが大学の……と彼が言いかけたのを私

は引きとった、大学院の学生だった、わたしは。そうかね、と彼はまたあらためておどろいた顔をした。でも、わたしはまだ若かった、私はそうつぶけたが、彼は彼で自分の回想をつづけた。高校生ぐらいの女の子にはよくわたしらのような女王に憧れるのがいたがね。

小学生も大学院生も彼の基準に外れていたのはたしかだ。私は視線を上げた。彼の背後の壁に、女王時代の彼を描いた油絵がかかっていたからだ。金持の奥様のお招かれ姿の彼ではない。銀色に光る豪華なイブニング・ドレス姿に小さな王冠まで肩までかかる長い金髪の上にのっけていて、彼は真正銘の女王に見えた。少し安っぽかったのも事実だが、それでもこの荒れ果てた、こわれかかった椅子とベッドが大部分の面積を占めるアパートでは、それが、やはり、もつとも豪華な飾り、いや、何ものかだった、あれは、と私の視線が訊ねたと彼は錯覚したにちがいない、ニューヨークの女王のコンテストで優勝したときの記念だ。憶えているかね。私はかぶりをふった、それは、たぶん、私が立ち去ったあとのことだろう。感情のこもらない言い方で私はつづけた。

女王に彼らを言いあらわす意味があるのを知ったのは、彼らとつきあつてからのことだ。私がアメリカに行つたのはクエーカー教の平和団体が世話をする高校生留学のとき以来だから、私は英語はまず不自由なく判り、あやつれる。しかし、しよせん、良家の子女の学校英語だ。彼らを蔑んで言う、奇形の生きものの意味をもつ「性的倒錯者」ということを知ったのもずっとあとのことだった。「性的倒錯者」と言うとき、人はたいいてい露骨に軽蔑を顔に出したが、「女王」の場合も、あの、例の……という表情をした。そうした表情をしなかったのは、彼らに憧れて近づいて来ていた、女王のグループだった女の子の一人だけだった。それは彼女たちが彼らの世界にのめり込んで、彼女たち自

身が異者になったことでもあるにちがいない。彼女たちはたいていが自ら出て来てたのか、それとも追い出されたのか、学校の中退者^{ドロツファウト}だった。彼女たちも異装することにおいて、彼らに負けなかった。彼らの場合はできるかぎり正常な女性の服装をすることが異装だったが、彼女たちの場合はできるかぎり奇抜なかつこうをする。それが彼女たちの異装だった。ただ、異装であることにおいて両者は一致していた。彼女たちのなかには、マーガレットのように女^メ装^{ゾウ}した^カかどで逮捕されたのもいた（当時はまだ、彼らが白昼堂々異装をひけらかして歩いた都市では、女装は違法の行為だった。すくなくとも街なかにおいては）。そのマーガレットが、ミネ、わたしたちのように女王^{クイーン}が好きになった女のことを何んと言うのか、知っている？ と私に言った。知らない。私がかぶりをふると、彼女は大声で笑い出した。性倒錯など異常心理の研究書からのものだと言って、コピーして来た紙を見せた。そこに、たしかに私たちのような女についての記述があった。この種の人たちはあまりにも異常なので、分類しがない——私も大声で笑った。

マーガレットはどうしているのだろう。

自然につぶやきが私の口をついて出た。

ああ、あの子か、というふうにジョンは軽くなずいた。

最近、街でバッタリ出会ったことがある。最近と言っても、二、三年まえのことだが。子供を連れて歩いていた。

年をとっていた？

いや、けつこう若かった、すくなくともそう見えた。

子供を連れて歩いていたら、彼女もなみの女に戻って、結婚でもしたのか。もつとも、なみの女に戻らなくて、子供を連れていてもおかしくないが。

コレットはどうしている。

私は女王^{クイーン}たちのことを訊ね始めた。コレット、キャシー、グリア、アン、ミレット。白昼堂々の異者の美の行進を思い出しながら、私は次々に名前を口に出した。自然にアンまでが、当のジョンを眼のまえにして私の口から出て、私は苦笑したが、すぐ、アンはジョンとは別人なのだとあらためて思った。コレットは一時ファッション・モデルをして、かなり売れていた。今は知らんね。引退したのだろう。年だから。キャシーは手術をして、ほんとうに女になって結婚した。もつとも最近離婚したみたいだ。別の男とくらしているという話も聞いた。グリア？ あ、彼女は死んだ。AIDS^{エイズ}で。死ぬまぎわには、彼女はAIDS^{エイズ}の運動の活動家^{アクティビスト}になって、けっこう有名だった。デモの先頭によく立っていた。写真が新聞に出ていた。女王^{クイーン}、デモを指揮する。そんな見出しがあった。アン？ 彼女はここにいる。もつともここにいるのはジョンだが。ミレット？ どこかへ消えた。全然、知らない。アン。

私はジョンにむきなおった。そして、もうひとつの名前を呼んだ。

あなたはもう異装^{ドラッグ}をしない。

する、ときどきは、と彼は大きくうなずいた。じゃあ、今して欲しい。私は言った。私は何も旧知の消息をたずねにここに来ているのではない。私はつづけた。過去が何んであれ、わたしは執着するつもりはない。過去は過去、現在は現在、未来は未来、で生きている。わたしがここにやって来たの

は、あなたのかつての異装^{ドラッグ}の姿が限りなく美しかったからだ。その美はわたしをうちのめした。わたしはその美にいかれた。「ドラッグ」ということばはふつう使う意味では「女装」だったが、そう英語を使いながら、「異装」という二文字の漢字が自然に眼に浮かんで来ていた。

その限りなく美しかったあなたをわたしはもう一度見たい。

何んのためにかね。

彼は突き放した言い方をした。

写真を撮るためかね。写真を撮って、わたしらの写真の個展でもやって売り出すためかね。しかし、あんたは写真家ではなかったはずだ。

その通り、わたしは写真家じゃない。第一、わたしはカメラも持って来ていない。しかし……

私はひと息、ことばを切ってからつづけた。

あなたのあのときの美しさはわたしの記憶のフィルムにどのカメラで撮ったよりも鮮明に焼きついている。

おれは年をとった。

ジョンは弁解がましく言った。弱気のかげが彼の表情に差した。それは私がもつとも見たくない表情だった。私は励ますように言った。

^{ドラッグ}異装の美は年齢に関係がないからドラッグの美だとわたしは思う。わたしは今もあなたの美しさは変らないと思う。あるいは、かつて以上に美しいと信じる。

私は壁の彼の女王の肖像画を一瞬眼顔で指しながら最後の文句を言った。「信じる^{ビリーフ}」ということば

が自然に口を衝いて出ていた。その「信じる」^{ビリーフ}が彼を動かしたのでないかと、私は思う。いや、それこそ信じる。ジョンはしばらく黙り込んで考え込んでいるように見えたが、唐突に立ち上ると黙って奥の部屋に消えた。

私はひとりで彼がさつきいれてくれたお茶を飲んだ。紅茶ではなかった。ウーロン茶だった。アメリカも変った、と私は思った。中国料理店、日本料理店の出前のメニューが五、六枚、床に散らばっている。出前も昔にはあり得なかったことだ。

電話がかかつて来た。ジョンを呼ぼうと思ったが、思いなおして私が受話器をとった。ジョンはいるかね——と嵩にかかった横柄な口のきき方をする男を、いない、と私もぶつきらぼうにさえぎった。アンならいるが、ジョンはいない、と自然につづきかけたことばを私は囁み下ろした。眼を閉じると、大きな姿見のまえで懸命にアンへの変身^{ドラッグ}に異装しつつある彼の姿がかえって明瞭に見えてきた。全身裸かで化粧する彼の背の肩に大きなしみがついている。

ほんとうか。

男はまた横柄な口のきき方で念を押した。英語に癖があった。外国人にちがいないと私は見当をつけた。

ほんとうだ。

私もぶつきらぼうに念を押した。

それからしばらく私はペーターのことを考えていた。さつきジョンが写真家やら写真家がひと旗あ

げる個展やらのことを口にしていたからだ。ジョンが彼のことを念頭においてそう言ったかどうか、私には判らない。第一、彼がああ西ベルリンからやって来たというたよりなげなドイツの若者のことを憶えているのかどうか。まだ、「壁」^{ウォール}のあつた時代のことだ。いや、それは「壁」ができた直後の時代だったか。とにかく彼はよく「壁」を話題に出した。そのうち、「壁男」^{ウォールマン}とみんなから呼ばれるようになっていた。

「壁男」に言わせれば、女王^{クイーン}たちは、すべて、「壁」を越えた人間たちであつた。男の世界と女の世界のあいだに避けがたく存在する「壁」を彼らは乗り越えて来たのだ。ほんものの「ベルリンの壁」の場合、強引に「壁」をよじ登って乗り越えようとしたのもいれば、自分の車をぶつからせてまでして「壁」を切断する、あるいは、地下に穴をうがってまで越える、いや、越えようとする。失敗すれば、もちろん、まず死だ。よくて、一生傷を受けて障害者、あるいは、日かげ者になってくらす。女王^{クイーン・ウォール}壁」(というぐあいに彼は造語していた)を越えようとして、女王^{クイーン}たちはからだの一部をふくらませ、あるいは、逆に切断し、穴までうがつ。失敗すれば、まずそれこそ男とも女ともつかぬ奇形——まさに「フリーク」だろう。絶望のあけく自殺するのも数多くいる。そして「ベルリンの壁」と「女王壁」は、二つともにいったん越えてしまえば、あと戻りはできない。それはない。

「壁男」はよくそんな話をした。ベルリンは女王^{クイーン}の伝統の強い都市として有名だ。私もその話は聞いていた。かつてから名の知れた異装異者のキャバレーがいくつもあつた。ただ、「壁」の存在がその異装異者の文化の伝統にある緊張をあたえている。彼はそんなふうにも言った。彼自身が「壁」を越えて来た人間だった。「東西」間のベルリンの「壁」ではなかった。彼が生まれ育った(たしかフラ

ンクフルトだった。それともデュセルドルフだったか、どちらも同じことだ。文化の不毛なビジネスマンの都市。彼はいつもそう言つて罵倒した。西ドイツから、わざわざ「壁」を越えて、東ドイツ内の陸の孤島の西ベルリンへ行つた。しかし、彼の言いたかつたことは、その「壁」のことではない。西ドイツにいれば軍隊へ行かなくてはならない。西ベルリンに住めば、あそこは兵役が適用されないことになつているので行かなくていい。ぼくは兵隊になりたくないんだ。ぼくは平和主義者だ。それで西ベルリンの大学へ行つた。大学はぼくのような兵役逃れの学生ばかりだった。ぼくのような男の学生についての話だがね。その点、女はいい。女は兵隊に行かなくてすむ。ぼくは女性になりたかつたね。イスラエルでは、と私はさえぎつた。女も兵隊に行く。そう聞いたことがある。あなたはマヤを知っているじゃない。ここの女王のひとり。彼女は陸軍の婦人部隊の軍服に憧れた。彼女の異装の最初はその女性の軍服だった。今はやめたみたいだけど。それからもうひとつ。私はとつておきの秘密を打ち明けるように言つた。アンは——と言いかけて、私は、ジョンは、と言いなおした。彼は海兵隊にいたことがあつた。海兵隊？——とさすがにペーターは大声を出した。もつとも戦闘に参加したことはないみたい。海兵隊のなかのパン焼き係で、ただパンを焼いていた。それに、ヨーロッパに駐留していたときに、彼ははじめて女王のクラブへ行つた。ベルリン？「壁男」は眼を輝かせた。私は冷淡にかぶりをふつた。彼の「壁」談議はもうけつこうだと思つた。どこだかは知らない。とにかくヨーロッパだ。アンは、いや、ジョンはまえから異装したかつたのだ。だから、そこへ行つた。実際、彼はそこで生まれてはじめて、女王になつた。いや、まだそこまではいかない。ただの「フリーク」になつただけのことか。ジョンがそうわたしに言つた。どうして彼は海兵隊などに入つたの

かね。「壁男」が訊ねた。あれはたしか志願して行くはずのものだ。「平和主義者」の言い方に軽いがめだてのひびきがあった。旅したかったからだと彼は言っていた——と私は答えた。海兵隊の基地は世界のあちこちにある。だから、世界を旅して行ける。世界のあちこちに女王がいる。女王に会える。自分も仲間になつて女王になる。それで彼は海兵隊に入った。私がそう口早につづけると、「壁男」は少しいらだつたように、それはほんとうにジョンが言ったことばか、とさえぎった。これは、わたしの想像。私は笑った。しかし、たぶん、たいしてまちがっていない、と私は思った。

ぼくは日本にも行つて来たよ、とペーターは口調をかえて言った。急にぐだけて、おまえと親しくなつた、おまえに近づいて来たという感じであつた。私にはその身勝手な距離の縮小、接近がいやだつた。そう、と私は冷淡に言つただけだつた。おかまのところへも行つて来たよ。眼顔で、部屋のはしで何かしきりに話し込んでゐる女王二人を指して彼はつづけた。そう、と私はまた冷淡に応じた。やはり、東洋人^{オリエンタル}はいい。小柄な上に骨格が西洋人とちがつて男でももつと女性的にでき上つてゐる。だから、もつと女に見える。いや、女だ。女そのものの、まぎれもなくそうだ。ペーターは彼がいつも持ち歩いている小さなアルバムを見せた。彼はいつもそれを見本に持ち歩いて、あちこちで自分の写真の売り込みに精出してゐた。ほら、これ、これが日本のおかま。彼の長い指が何枚かの写真の上をなめらかに動いた。キモノ姿、ユカタ姿、イブニング・ドレス姿、いや、大胆にTシャツ（マークは「UCLA」）にショート・パンツ。髪もこざつぱりとショート・カットでまさに少年のように、彼女ははにかんで清潔に笑う。しかし、やはり、彼女は女だ。そう、見える。いや、そのものだ。ペーターは興奮した声で言い、私もイエスと言つた。しかし、そのあと私は、わたしは彼らに興味はないの

よ、とつづけた。おどろいた顔をペーターはした。おどろいたというよりたまげた、呆れた顔だ。私はことばをつづけた。わたしはこのあいだ日本に帰ったとき、そういうところに行った。しかし、ちがう——私はことばを切った。何がちがう。ペーターは訊ねた。そうね——私はことばを選びとりながら言った。この人たちはたしかにこつちの女王たち^{クイーン}よりはるかに女に見える。しかし、それだけのことなら、わたしはもともと女だ。日本の彼女たちは、つまり、苦心してわたしになっただけのことじゃないかしら。なるほどわたしは——私は苦笑した。彼女ほど美しくはない。しかし、わたしの仲間、女王^{クイーン}につきまとうグルーピーのマーガレットなら、彼女は美しい。この日本の彼女に劣らぬぐらい美しい。私は「UCLA」のTシャツ、短かいショート・パンツ姿の少年^{少年}を指した。彼女はたしかに美しい、念を押すようにくり返した。しかし、彼女の美しさはマーガレットが同じ姿をして出て来るのと変りはしない。ジョンの美しさは——と言いかけて、私は、アンの美しさは、これとはちがうと言いなおしてつづけた。

ペーターは私のことばにうながされたようにアルバムの別の頁を開いた。たしかにそこにアンの写真が出ていた。イブニング・ドレスの、そしてまた金持の奥様のお招かれ姿のアンだ。しかし、私は言った。これはアンじゃないとわたしは思う。この美しさはアンの美しさじゃない。私は冷淡に言った。ペーターは打ちひしがれたような顔をして、アルバムを閉じた。

しかし、ペーターがほんとうに打ちひしがれたのは、そのときでなかったように思う。それはもつとべつのときだ。

ペーターに金の話が来た。私が今「トーク・オフ・ザ・マネイ金の話」と言うのは、話を持って来たジョンがまさにそう言ったからだ。私たちは貧乏だった。女王は舞台のショウで稼いでいたが、いや、なかにはどこかのホテルへ出かけて稼いでいたのもグリアのように誰かの「妾」になっていたのもいたが（私はときどき女判事はその不動産屋という彼女の相手にどんなふうないかめしい顔をして抱かれるか、想像したものだ。いや、この想像の言いあらわし方はまちがっている。私が想像したのは、彼女がどんないつもながらのおごりかな顔で彼を抱いたか、だ）、みんなはそれぞれゆたかではなかった。豪華な衣裳も大半が「スリフト・シヨップ儉約屋」と呼ばれる古着屋で買って来たものでなかったら、ファンからまきあげたものだ。ブルーピーにはもつとお金がなかった。いろんなアルバイトを彼女たちはしていた。学生だった私も彼女たち同様にスーパールの売り子にもレストランの給仕にもなった。ペーターも貧乏だった。彼もいろんな手間仕事にありついて、それで食っていた。その彼にジョンが「金の話」をもつて来た。ある老人のために何人か女王の写真を撮ってくれ、という話だ。老人の性欲も性能力もおとろえて来ている。ただ、女王たちの写真だけが彼の性欲と性能力を駆り立てる。彼はいろんな手段で女王たちの「クイーンポルノグラフィ」を集めた。写真を撮らせもした。しかし、いいのがない。いいのがないかという話がジョンのもとに来了。いいのというのには二つ意味があった。いいモデル。そして、いい写真家。大金を出すと言って来た。いいモデルなら、自分のところにいる。いい写真家——ひとつ、やつてみるかね。あんたは彼のくれる金で、個展を開ける。ジョンはペーターに距離をおいた言い方で言った。彼を試している。そんなひびきが口調にあった。老人は有名な大会社の社主だ。名前は言わんが。ジョンはつけ加えた。

いいモデルはジョンが何人か選んだ。キャシーがなかに入っていたことは私は憶えている。それと濡れた黒い肌の輝きをもつミレット、もうひとりプエルトリコ人を彼が選んだのは、変化をつけるためか。ペーターは何日もかかって撮った。私は子細は知らない。そのとき、私は日本に帰っていた。またニューヨークに帰って来たときに、私はジョンの口からことの顛末を聞いた。おれは、あいつを金持野郎の老人のところへ連れて行つたんだがね。うまく行つた？　——私は訊ねた。彼はかぶりをふった。老人（その「オールド・マン」ということばを彼は癖をつけて発音した。「畜生め」という感じがあつた）は、ペーターから写真の束を受けとると、しばらく黙つて見ていた。それから巨大な卓子の抽出しから二つのものを取り出して来て、ペーターのまえの小さな卓子にほうり投げるようにして置いた。ひとつは札束だったが、もうひとつは写真の束だった。「見ろよ」と老人はペーターに言つた。すべて女王の写真^{クイーン}だった。いろんな姿態のがあつた。むき出しにした自分のものを手で握つて黒い下着姿の女王^{クイーン}が仁王立ちになっている。女王二人がたがいちがいに寝ておたがいのものをなめ合つている。女王のひとり^{クイーン}がべつの女王の尻に背後からおおいかぶさつてなかに入ろうとしている。そうかと思うと、手術をすませた女王^{クイーン}が手術前の女王^{クイーン}のものにナイフを宛がつている。すべてが美しくなかった。いや、醜^{アグリイ}かった。醜悪なものだった。醜い。ペーターが思わずひと言洩らした。すぐ老人があとをつづけた。その通り、わしのものはこんなものでは動かん。そう言つてから、老人はペーターを見た。あんたの写真は美しいかも知れん。しかしだ——老人はことばをひと息切つてつづけた。あんたの写真ではわしのものはそれ以上に動かんね。あんたの写真の美しさはこつちの写真の醜さに負けている。老人はそう言つてから、ペーターの写真^{アグリイ}を丁寧^{アグリイ}にすべて破つて紙屑箱のなかにほうり込

んだ。

ペーターはどんな顔をしていた。

しばらくして私はジョンに訊ねた。

打ちひしがれた顔をしていた。

彼は私の思った通りの答を口に出した。

アンの写真は彼の写真のなかになかった。私はつづけて訊ねた。

彼女は彼に撮らせなかった。

彼は他人ごとのように三人称を使って答えた。私はあとをつづけた。

どうして。

彼女は彼女の美しさを彼には撮れないと思ったからだ。彼女の美しさは彼の能力を越えている。

彼は三人称をつづけた。

なぜ、あんたはおれたちのところに来た。

ジョンはときどき訊ねた。私が彼らといっしょにいたあいだのことだ。

あなた方の美しさがわたしを自由にしたからだ、と私は言った。あなた方の美しさといくと、わたしまで自由になるからだ、とも私は言った。あなた方がわたしを自由にしたとも、あなた方のなかにいるとともに、私は言わなかった。私はそのあいだに明瞭な区別をたてていた。おれたちがそんなに自由なのかね、とジョンが言うときがあった。私はいつも強くかぶりをふった。あなた方がべつに他

の人にくらべて自由だとわたしは思わない。他の人同様、わたし同様、あなた方は不自由でもあれば自由でもある。ただ、異装ドラッグしたとき、あなた方は美しくもなれば、自由にもなる。あなた方の異装ドラッグの美しさがあなた方を自由にするのだ。あなた方ばかりじゃない、あなた方の美しさにいかれたわたしまでも自由にする。じゃあ、あんたも異装ドラッグして、男になればよい——とジョンは、あるとき、私に言った。ノウと、私はまた強くかぶりをふった。本質的に男は美しくないのよ。私はつづけた。

しかし、私は、女の美しさもそれだけではないやなのだと言った。それはどこかに「キュート」とか「プリティ」とか、日本語でまとめて言うなら可憐さを、女の美しさはひきずって歩いているからだ。わたしは可憐さをふくまない純粋に「ビューティフル」なものが欲しいのだ。私のことばにジョンは理由を訊ねた。それはわたしがもうウンザリするぐらい、かわいい女の子、キュート、プリティな若い女性ヤング・レディとして生きて来た、生きて来さされたからだ、私は強い口調で答えた。日本は自由のない社会だから——とジョンはありきたりのことばを口に出した。

そういう社会では女のそういう役割が強調される。ありきたりの、「ニューヨーク・タイムズ」の記者でも書きそうな文句をつづけるジョンに私は、わたしは日本とかアメリカとかの比較の話をしていないのじゃない、とさらに強い口調でさえぎった。日本はたしかに自由のない社会かも知れない。しかし、それとくらべてアメリカがましだと言っても仕方がないことだとわたしは思う。

しゃべりながら判つちやいないな、の気持があつた。はじめてアメリカに留学して来たのなら、アメリカの社会の自由に圧倒され、幻惑されたかも知れない。しかし、わたしはすでに高校生として一度アメリカにやって来ていた。そのときでさえ、わたしはさして自由な社会にやって来たとは思って

いなかった。やはり、それは、「かわいいお嬢さん」が基準になって若い女性が語られる社会だった。だから、わたしは賞められた。私はジョンに強い口調をつづけて言った。はるばると遠い日本からの留学生を見ならえ、と言われてね。もちろん、それは私が十分に、勉強のよくできる真面目なかわいいお嬢さんだったからだ。

二度目のアメリカはどうだ、とジョンは訊ねた。まえよりもよくなったにちがいない、もちろん、日本にくらべてはるかに自由だ。しかし——と私はさつきからと同じ強い口調でつづけた。本質的には変っていない。大学でいばっているのは、結局、男のえらいさん方だ。そうでなかったら、男のえらいさん方と同じようになった女のえらいさん方だ。彼らにとり入ろうとするのは、なんとかして出世のハシゴを上ろうとする男ども。こういうところでは、女にはめつたなことに機会はない。方法は二つ、男どもと同じようになるか、それともかわいいお嬢さんになるか。わたしはそういう世界は日本の大学でさんざんにつきあつて来た。二つの道のどちらも選ぶことをやめたわたしには未来はなかった。それで、あんたはアメリカに来たのかね——ジョンは憐れむように言った。結果はどうだったのかね。さつきも言ったけど——と私はつづけた。本質的に変りはしなかった。それが判つたところ、わたしはあなた方に会つた。あなた方の美しさに出会つた。あなた方の美しさは「キュート」「プリティ」な美しさではなかった。ただビューティフル——美しかった。わたしはいかれた。——

私は早口につづけた。

寄宿先の大学教授に、突然、私は部屋を引き払うと言つた。彼がしばらく黙り込んでしまったのは

よほどおどろいたからにちがいない。どうしてまた、とかなりな長さの沈黙のあと、ようやく彼は口をきいた。そばで奥さんも案じ顔になった、何か不満があるんですか。彼女にはめずらしく詰問するように訊ねて来た。ありません。私は答えた。

大学教授は私の父親の友人の友人だった。私の父親同様の医者。医学部の教授をしていた。そこにおいて父親と同じであつた。親切ないい人だった。奥さんも善良なクエーカー教徒。人を愛し、人から愛されていた。私は二人を好きだった。愛しもしていた。彼らは私の申し分ない「アメリカの両親」だった、私はそう「日本の両親」に手紙を書いた。そして、私はアメリカ、日本どちらの両親にとつても、ずっとこれまた申し分ない「かわいなお嬢さん」だった。「アメリカの両親」は何かと言えば、私をパーティやら会合やらに連れて行き、彼らの「日本の娘」を紹介した。「キ्यूート」「プリティ」、二つのことばが散乱した。

不満があるのかという「アメリカの母親」の質問に私は強くかぶりをふった。じゃあ、どうして——と訊ねかける彼女に、とにかくわたしは出て行く、出て行かなければならない。わたしには、今しか機会がないのだから。私はそう言った。何んの機会？　そう訊ねたのは大学教授だった。私は答えられなかった。しかし、今が機会であること、それだけは明瞭だった。大学教授夫妻はそれ以上に私をとめにかかった。さすがにそこは彼らは「アメリカの両親」だった。「日本の両親」ならそれこそあらゆる手段をつくしてとめにかかったにちがいない。「アメリカの両親」は、いや、「父親」の大学教授のほうが、それはきみが選んだことだ、グッドラック、そう言ってくれた。

「グッドラック」だったかどうか。

何人かで大きな家に住んでいた。大きなボロ家だ。そこを女王^{クイーン}の何人かとグルーピーの女性何人かが共同で借りて住んでいたのだ。共同生活をしていたのではない。みんなはてんでんばらばらにくらしていたが、そんなことは部屋が何室もあれば、便所、シャワーもあちこちにあるというアメリカの家のくらしではふつうのことだ。変っているのは、なかで同じ人間が男になったり、女になったりしていたことだ。グルーピーの女性たちと、その女になった男は女として抱き合ったり、男に立ち戻って男として抱き合ったりした。

「ファンタジア」によく来るようになった私に、じゃあ、いつしよに住まないか、と言い出したのはグルーピーのマーガレットだった。彼女は、そのときすでに私がジョン、いや、それ以上にアンにいかれていたのを見抜いていたにちがいない。私が、それはいい考えだ、とうれしさを押し隠すようにしてもったいぶった口調で言うのと、人のいいマーガレットは、ひと部屋今とにかく空いている、ちよつとみんなから離れているから、あなたは勉強もできる、あなたはとにかく大学院の学生なんだから、と私の気をひくようなことを縷々並べた。私は、じゃあ、引き移るとするか、とあいかわらずもったいぶった口調で応じた。

ジョンはそこには住んでいなかった。アンが二階のひときわ大きな一室に住んでいた。私はジョンがどこに住んでいるかさえ知らなかったが、彼が「ファンタジア」にアンとして出演するときには必ずその時代物の家具が乱雑に並べられた部屋のブドウのふち飾りのついたひときわ古風な姿見のままで、ジョンはアンになった。時代物の家具はひとつひとつはかなり値のはる物らしかったが、あ

なふうに乱雑に並べられると、どこか場末のガラクタを並べた古道具屋に見えた。その古道具屋のガラクタのなかでジョンはアンになり、そのアンと私は抱き合った。

そのとき私は、私が自分たちがどちらの性になって抱き合っているのか、よく判らなくなっていた。彼女が女だとすれば、私も女で、それはレスビアンの性交だった。しかし、私にはレスビアンの趣味、いや、欲望はなかった。しかしまた、どう見ても女としか見えない、いや、女であるアンと抱き合っている、私は男ではなかった。女のままでいた。私たちは抱き合いながら、女と男が組んずほぐれつ形成する土俵の外にいた。異者が抱き合っている。性交している。私はアンと抱き合いながら、その図柄をとぎどき思い浮かべた。それが何んであれ一切から何をしようとしまいと異者は自由だった。思い浮かべながら、そうも考えていた。

アンが部屋にかえって来た——と思ったら、ジョンだった。さつきとまったく同じ姿をしていた。よれよれのワイシャツにジーンズのズボンだ。私のまえにさつきと同じように坐ると、冷えきったウーロン茶の残りを一気に飲んだ。ひとつのことばが口を衝いて出た。

ビールはないのかしら。

ない。

彼は短かく応じた。私はやさしく訊ねた。

アンはどうしたのかしら。

彼女は死んだ。

彼はまた短かく応じた。

どこで。

眼顔が今出て来た部屋の扉を指した。眼のまわりがうつすらとくろずんでいるのは拭き取ったアイシャドウのあとだろう。

いつ死んだのかしら。

私はまたやさしい声を出した。自然に声がそう口から出た。

判らない。

彼はゆつくりつぶやくように言った。

とにかく死んでいるのが判ったのは今さっきだ。

それからしばらく黙った。そして、ポツリとまたつぶやいた。

おれはもう異装をやめる。^{ドラッグ}いくらやってみても、アンにはもうおれはなれないからね。

それが判った？

そうだ。それが判った。

彼は私を見た。

頼みがある。

何。

あんたの記憶のなかのアンを大切にやってくれ。しばらく黙ったあとで、今度は私がポツリと言った。

する。

私はそのまま立ち上った。私はアンに——アンの美しさに会いに来たので、ジョンに会いに来たのではない。私にその気持があつた。老人のグチは聞きたくない。また、グチを言うその姿を見たくない。私にはその余裕はない。そう私は内心で言つた。

もう少しいてくれないか。

彼は訴えるように言つた。いや、真実、彼は訴えていた。私はいったん立ち上つた姿勢をもとに戻した。古びた時代物の椅子がきしんで音をたてた。私は、この椅子はかつてあの古道具屋のような大きな部屋のなかにあつたものでないかと一瞬考へた。

おれのためじゃない。死んだアンの追悼のためだ。

ジョンは殺し文句を口にした。それから低声で歌い出した。アイ・ウオンナ・ビー・ア・パート・オブ・イット。……わたしは加わりたいたのだ。……聞き慣れた歌だつた。「ニューヨーク、ニューヨーク」。そのころはやつていた。アンがよく歌つた。私は微笑した。少し無理をした、うつすらとした微笑だつたが、微笑は微笑だ。歌い終ると、ジョンはすぐ言つた。

ひとつ訊きたいことがある。訊いていいか。
どうぞ。

ジョンか死んだアンか、そのどちらが訊ねているのかと言いかけて、私はやめにしてそれだけ言つた。
あんたは子供を……

少し言いよどんでいるように見えたが、彼はすぐためらいを押し切るようにつづけた。

堕ろしに日本へ行つた。そして、それきり帰つて来なかつた。あれはなぜだろう。

最後の一句を彼は他人ごとのようにつぶやいた。

それは……

私も言いよんだが、同じようにためらいを押し切るようにしてつづけた。

アンとの愛が終つたから。

もちろん、私はおなかのなかにできた子供を産むつもりはなかつた。しかし、ジョンが強圧的に、ここじゃ堕胎できない、あんたの国の日本でなら、いくらでも堕胎できる、おれはそんな話を聞いた、ここにお金がある、すぐ行け、と言ひ出したとき、衝撃を受けた。彼は酔つていた。それは事実だ。しかし、彼はこうも言つた。アンは女だ。女があんたの子供の父親になれるはずがない。彼はあざ笑うように言つた。子供の父親はべつにいるとまでは彼は言わなかつた。しかし、ジョンの酔いにすわつた眼が言つた。たしかに女が父親になれるはずはなかつた。私はうなずいた。それは私のアンに対する愛が終つたことを確認するうなずきでもあつた。私はいつたん日本に帰つてことをすませたあとまたニューヨークに帰つて来たが、彼のところ、いや、彼らのところへは帰らなかつた。私のなかで、彼らの美しさは輝きを失なつていた。

何年まえのことになるだろう。

彼はまたしばらく黙り込んでからポツリと言つた。私は死児の齢を数えるつもりはないと思つた。

あんたはあれからどう生きて来たのかね。

彼は私の思いを無視するように言つた。私は自分の人生の記録をあなたに伝えるつもりはないと言

い返した。それはあなたにまったく関係のないことだ。しかし、そう強い口調で言い返してから、べつに変わった人生を送ったつもりはない、と前おきして、少ししゃべった。あのころ、わたしがあなた方とくらしていることはすでに多くの人が知っていたことだ。この国でも、当時はそれだけでも十分に衝撃的なことだ。誰もわたしに面とむかつては何も言わなかったが、それは誰もがわたしの背後で何か言っていたことだ。しかし、とにかくわたしは論文を書き、学位もとった。日本へ帰ってから、大学で教えもした。しかし、わたしはやめた。それは、結局、わたしが「かわいい女性」ではなかったからだ。大学をやめて、翻訳、行商、スーパールのレジ、喫茶店経営、専業主婦、今は英語教材のビデオ製作販売。これはあたった。そのあいだに結婚は二度。そして、二度、離婚。今はひとりだが、ボーイ・フレンドはいる。オールド・ボーイ・フレンドだ。そう早口にたたみかけるように言いながら苦笑したのは、そのオールド・ボーイ・フレンドがどこからかアンの写真を見つけて来て、これ、誰、きれいな人だね、と訊ねたのを思い出したからだ。アンはひとりですべて写っているのではなかった。私もいて、二人は抱き合はんばかりにして寄りそっている。わたしが愛していた人。私はそう言った。彼はおどろいた顔をした。それから遠慮がちに言った。きみはレスビアンとちがうのだろう。少し不安げでもあった。ちがう、と私は明瞭に応じた。彼はうなずき、無邪気に安堵した顔になった。

平凡な人生。

私が言うのと、ジョンは笑った。

十分屈折している。

少しは。

私も笑った。それから私は口調をかえてつぶけた。

屈折にももちろんあなたは無関係。ただね、屈折を決断するとき、あなた方といたことが決断する力をあたえてくれたような気がする。人間は何をしても自由だ、自由がなければ、人間は人間でない。そうあなた方は、いや、あなた方の異装ドラッグの美しさがわたしに告げた。

子供は……

ジョンは私のおしゃべりをさえぎるようにして言った。

二人。

私は素直に応じた。どちらも息子。べつに異装ドラッグしていない。

私はいたずらっぽく笑った。それから私は、あなたの息子さんは、と唐突に彼が昔、自分に息子がいるのだと言ったことを思い出して訊ねた。いや、彼が言っていたのではなかった。アンが言っていたことだ。

彼は死んだ。

彼のそのことばを私はアンのことばとして聞いていた。

ナムで。六八年。……彼も海兵隊マリーンだった。「ナム」は、もちろん「ベトナム」のことだ。いや、ただの地名ではない。「ベトナム戦争」のことだ。もうアンではなく、ジョンがしゃべっていた。

あんたはそのころ日本で何をしていた。

わたし……

口ごもったあとで、反射的に自分でも思いがけなかったことばが口を衝いて出た。もちろん、彼の

息子の「ナム」での死が思いにあつてのことだ。

反戦のデモをしていた。

いや、もうひとつ、思いがあつた。それは私が参加して歩いたベトナム戦争反対のデモ行進のなかに日本の女王^{クイーン}の一団が来ていたことだ。おかまという隠微なかたちの一団ではなかった。わずかな人数だったが、これも白昼堂々、異装^{ドラッグ}して歩いていて。その意味で、彼らはおかまではなく女王^{クイーン}だった。私はそのときまざまざとかつていっしょにくらしたアメリカの彼らのことを思い出していた。もちろん、アンのこともだ。アンもデモ行進に行つたのかどうか。私が訊ねる先にジョンは、

いろんなことがあつたね。

とつぶやいた。

そう、いろんなことがあつた。

私もつぶやいた。

それからしばらく無言でジョンと私とはむかいあつていた。猫が足もとでじやれた。彼は立ち上つて、キャッツ・フードの箱を棚からおろして中身を皿にぶちあげた。コレット。彼は猫の名を呼んだ。それは女王^{クイーン}のひとりの名前だった、今は引退してしまつたもとファッション・モデルの女王^{クイーン}。

ところで、あんたはほんとうに何んでまたおれに会いに来たのかね。

椅子にかえつてしばらくしてから、不意にジョンは訊ねた。

アンを見たかつたのは判つた。さつき、あんたはそう言つた。もつとも美しかつたアンをね。しかし、何んでまた、そのもつとも美しかつたアンを見たくなつたのだ。

最後のことはあきらかに詰問する口調になっていた。その口調でジョンはつづけた。

それはあんたがアンはもう死んでいるとみきわめをつけたからだろう。もう美しいアンになる能力を失なった老いて醜いジョンだけがここに生き残っていると考えたからだろう。その老いて醜いおれをあんたは見に来た。

一瞬私が考えたのは、彼が襲つて来るのではないかということだった。彼はもと海兵隊^{マリーン}だ。何かえも、ものがあれば、それで襲いかかる。いや、銃で私^{ガシ}を射つ。私は恐怖に駆られたが、猫が救いになった。キャッツ・フードの食事を終えた猫が彼の膝にじゃれかかった。よし、よし、というぐあいには彼は猫撫で声を出した。その猫撫で声は彼自身にもつとも効果をもっていた。彼の姿勢からは、りが失なわれた。私はひと息ついたが、同時にそれは、私の乳癌は転移している、あと私の生命は長くない、と言われている、いや、わたしはそう判断している、それで私はアンに会いに来た、もつとも美しかったアンを見に来たのだという口から出かかった一連のことは口にするは、りを私自身が失なったことだ。さあ、これでもうほんとうにお別れすることにする。

しばらくまた黙つて対峙したあとで私はそう最大限にもつたいぶつた口調で言つて立ち上つた。

アンを大切にしておいてくれ。あんたの記憶のなかの美しいアンをね。

彼はさつきと同じことを口に出したが、ことばの途中で背後の扉が開いて、粗末な服装をした東洋人がひとり入つて来た。決して上手と言えない英語で彼はジョンに挨拶をした。中国語訛りの英語だったが、もうひとつ私が気がついたのは、彼のその訛りがさつき電話で話をした男の英語の癖のある発音をそのままに思い出させたことだ。ジョンは、ちよつと失礼、と有無を言わせぬかたちで私を

そのままにして彼を連れてまた奥の部屋に入った。放り出された私は軽く腹を立てたが、二人はすぐまた出て来た。こちらはミスター陳。ジョンは言い、中国人にしては大柄な、そして、暗ウツな顔をした男は軽く礼をした。こういう場合にありがちな初対面の挨拶がそのまま別離の挨拶という紹介の仕方だ。ミスター陳はそのまま去った。

私があらためてジョンに別れを告げようとすると、彼はズボンのポケットから写真を三枚取り出した。若い女性が三人写っていた。三人ともかなりな美女だったが、たぶん公平にそう言えたが、三人ともにその美女ぶりに何か不自然なところがあつて、異装の美女であることはすぐ判った。三人は中国人だった。裾が大胆に切れ上った中国服を着ていた。ひとりには真紅。もうひとりにはブルー。三人目は花模様。三人は微笑していたが、それはたしかに若い女性の微笑に見えたが、どこかとつてつけないような、無理をした微笑であつたことも事実だ。

これはミスター陳の商品だ。

ジョンは私が訊ねもしないことを耳もとでささやいた。もとは中国本土から二、三ヵ月かかつて船で密航して来た中国人だ、と彼のささやきはずいぶん。ようやくどこかで無事に上陸して来たのなかでめばしいのを引き抜いて女に仕立て上げる。仕立て上げたのを売り込みにまわっているのがミスター陳だ。そうジョンのささやき声は早口に訊ねもしない情報を私の耳に注ぎ込んだ。どこかのクラブで使ってくれないかとおれに言うんだが、あいつはもつとどこかの金持のじいちゃんに売ろうとしているのじゃないかね。中国には女にした男を金持の老人が買つて妾にする長い伝統があるという話だ。しかし、こういうことはどこにでもある。この三人の美女もこれでやつと過去の悲惨から自由に

なって安楽にくらして行ける。親元に仕送りもできる。これは人助けとちがうかね。

あなたもそちのほうの人助けのビジネスをやっているんじゃないの、と私は口から出かかったことばを嚙み下ろした。そのための写真じゃないの——内心でことばはそうつぶいた。しかし、それをさえぎるようにジョンは言った。ミスター陳は、あいつも男じゃない。ジョンの確信ありげなことばにたじろいで、私はあれであの人、手術でもしたの、と低声でさつき私と一礼を交した、どこからどう見ても男としか見えない、男でしかない薄汚い中国人の姿を思い浮かべながら訊ね返した。彼はもう一枚写真を見せた。さつきの男が長い髪のカツラをつけた女の姿でハリツケにされたように両手をあげて全裸で立っていた。あきらかにどこかのショウの写真だったが、乳房はほとんどふくらんでいなかったし、長い髪の毛と横向きにうつむきかげんになった彼の化粧された顔を除けば、全体はどう見ても男に見えた。ただ性器はなかった。ジョンはつづけた。あいつは文革のとき拷問を受けた。性器をハンマーで叩きつぶされた。こいつはもう男じゃない。私はもう一度写真を見た。彼も異装の異者だった。しかし、美しさを欠いた、徹底して欠いた異者だった。この強いられた異者の場合、もつとも美しかったアンははじめから彼にはなかった。彼女ははじめから死んでいた。彼の性器とともにハンマーで叩きつぶされていた。

つづきは製品版でお読みください。